日本民族性と佛教の発展（一）

鈴木大拙

本稿は昭和十八年十一月に高倉会館で講演されたものの筆録であり、最近、前高倉会館長 山名義順氏の遺品を整理中に、本学の鍵主良敬助教授によって発見されたものである。

現在では鈴木大拙全集の刊行がすべて完了しているので、鈴木先生の著作権をすべて継承している松ヶ岡文庫（代表者古田紹欽先生）の御了解と、高倉会館（館長新田秀雄氏）の御好意とのもとに、ここに本紙上に掲載できることになった。ここに記して感謝の意を表する。

第一講

私の題は、日本民族性と佛教の発展ということであります。はじめお話のありましたときに、私は「日本精神」としようかなと思ったのですが、「日本精神」だとちょっと言葉に癖が食い付いているような気がするのです。それで、それよりも「日本民族性」の方がよいじゃないか、こう思っているのです。それはどうしてかというと、「精神」という言葉

は大分道徳的な意味が入っております。そうしてまた、或る方面から見るというと、政治的な意味も入っているのです。そういうのをここに使うというと、私の喋りたいと思うところと食い違う点があるように思う。それよりも「民族性」という方が、そういうような臭みがなかろう、と、こういうつもりで「日本民族性」としたわけなんです。

ところが私は、そういう民族学というか、民族心理学というか、そういうようなものについては、何等の造詣ももっていない者なんです。だから、こういう民族性といっても、ただ極めて平易な、つまり常識で普通の人々が考え得るような点の民族性というもののお話をしたい。別にインドの民族がどうであるとか、シナの民族がどうであるとか、ヨーロッパの民族がどうであるとか、それと日本の民族はまたどういうものであるとか、そういうようなことは、私は一切知らないのでありまして、ただ現実に見るところの、この日本人気質とでも申しますか、それを民族性というわけにはいかないだろうが、しかしあまり一般的でもなく、いくらかそれに歴史的な観察も入れておきたいと思いますから、単なる日本人気質というわけでもない。いくらか歴史的な回顧ということと、そうして歴史上にどういう風に出て来たかということ、それと、佛教というものは元来インドに出て来たのがシナへ入って来て、そうして朝鮮に伝わって日本へ来たが、日本に伝わったところの佛教、それは大分本家と違っているような発展をしておる。その発展をしようというものが、日本民族性というものにどのくらいな影響を受けているであろうか、そういうことを申し上げたいというわけなんです。そうして本来学者じゃないから、極めて常識的にお話するということになるわけです。

そこでまあ大体ざっと考えてみますと、日本民族というものがどう決められるか。歴史を見ても日本には色々な人種、色々な民族があったものだろうと思われる。今日でもアイヌというのが北海道の方におるということです。それからまあ私などが子供のときに読んだ歴史を見るというと、九州の方に熊襲というものがあったという。土蜘蛛なんというのもある。それから出雲族なんというのもある。大和附近におったのが大和民族であったかどうか知らぬが、シナから来たシナ人というようなものも大分日本へ来ておったろうと思われる。それは、シナの方の海に、瓶を空に

して捨てておくというと、潮流に依ってどこそこの海岸を通って、どこをどうしてどこへ着くというようなことを研究する。そういうことをやった人のお話を聞くと、どうも今は覚えないけれども、シナの方をずっと日本海へ結んだ山陰道のところへ着くというようなことを聞いておったのですがネ。

そうするというと、出雲伯耆というようなところからずっと京都附近へやはり漢民族が来て居ったものでないか知らぬと思われる。聖徳太子のときに京都の太秦にお寺が出来たというようなことでも、ああいうところにわざわざお寺をお造りになるというのはどういうわけか、ずっと奈良近辺から京都の太秦へ建てられるというようなことは、何かあそこにやはり関係があったものだろうと思われる。そういうことは私は詳しくは知らないのだが、それから朝鮮の人も大分来ているに相違ない。まだ私等の知らないのがきっとあるだろうと思います。そういうものを一々計算して見るというと、どこが日本民族というのか甚だ限界がつきにくいようにも思われるかも知れぬと思うのです。北の方から来たもの、南の方から来たものというように、各方面から来た人間が集って今日まあ日本民族ということになっているのですナ。その民族が自分はアイヌであるとか、自分は熊襲の子孫であるとか、自分はシナの人種の子孫であるというような塩梅に、それぞれ移植のところをやかましくいわないで、また、いわない程に混一してしまって日本人というものが出来ておるのですナ。だから、そういう日本民族というものが出来て、そうしてそれが日本歴史においての何年間に全体こういう風に一つになってしまったか、各人種の意識の中に、わしはシナから来たものじゃ、わしは南洋から来たものであるとか、わしはずっと北から来たところの蒙古人種であるというような意識がなくなってしまって、そうして一つのものに何時の時代からなったものか、まあ、細かに研究したらば余程何かあるだろうと思います。

が、そういう一種の民族のような塩梅に考えられて来るようになる一つの原因というものが、私は何かあったと思うのです。それはどういうことかというと、日本が島国であるということが余程関係しておると思うのです。今日の

ようなことになれば、それは、島国であろうが、大陸であろうが、海があろうがなかろうが、そういうことは頓着なしに、交通の自由というものが非常に盛んに行なわれておるから、民族的限界というものはとられてしまうというようなことにもなるのです。つまり、小さな東洋の絶海の孤島というようなことはなくなってしまって、もう、アジアと日本との間の海なんというものもなくなって、ことにこの頃は、太平洋などでも一つになってしまうというような塩梅に、島国を空間的に限定せられるということがなくなってしまう。けれども昔はそういう船が発達しないし、それから無線電信というようなものも、飛行機というようなものも出来ぬ時代には、この海というものは、非常な力をもっておったものと思われる。それで固まってしまうというようになれば、自然にそこに一民族であるという自覚が強く響いてくるものだろうと思うのです。これが政治の方にも余程影響しておる筈と思います。島国というようなことが、民族統一の上において、そうして同一民族であるというような意識を強固にし、また発達せしめるに非常に与って力あったものだろうと私は思うのです。

これがヨーロッパのような国になりますと、山に限られたり、河に限られたりして、おのおの違った民族がみな固まってしまう。ある地方へ寄ってしまって、そうして片方と交通はするけれども、しかし山なら山、河なら河というものに隔てられて、その間に異種の民族であるという自覚が強くなってくると思うのです。今日では、国の垣に民族性を涵養するというか、民族性を助長するということは少いでしょうが、今日に至るまでの歴史では、こういう国の垣に限られて、あるところへ固められて、そうしてそう固められたというがために一つの塊になり、また或る場合においては、そう固められないで、しかもその間に何等かの隔りが出来て、そうして違った民族であるという心持ちが非常に強く維持せられておるような場合があるのですナ。そういう具合で、地勢というものの非常な関係が民族性の発展の上にあるのだと思うのです。「英雄の起るところ山河佳し」というような、誰か維新の際に起った人の詩の句があるのですナ。そういうことで地勢というものは余程関係すると思うのです。海に面した方には如何にも快濶なとこ

ろがある。山の人は嶮峻鞏固な意志をもっておるということもあるのです。

それからもう一つは、気候が余程関係すると思うのです。日本でも、奥州の人間と東海道の人間と、それから九州の人間と比べると余程気性が違うのです。北国の人になれば、雪で、ずっと年の半分くらい、ほとんど五ヶ月、十一、十二、一、二、三月というものは、外へ出られぬというような条件のもとに成長してくる。それであるから、東海道の人とか九州の人などが、雪ということも知らなければ、家の中にとじこもっておらなければならぬというようなこともないから、それはもう極めて快濶な気分が出て来る。北国の人はどうしても憂欝になる傾きがある。憂欝になるがそれと同時にまた意志の強い、ものに耐えるということがあり得ると思うのです。それからもう一つ、従順ということも、そういう点で、あるだろうと思うのです。どうも、雪の沢山降るところでは、いくら力んだところがしようがないから、それを受け容れる。自然の力の加わるままに、それに従順してゆくということはあり得るのです。真宗が北国に盛んであるというようなことも、或る意味でいえば、そういうようなことがあるかも知れないですナ。忍従してゆくというような消極性をもった、何でも受動的に受け容れるというようなことは、確かにこの北国人の特色であるだろうと思うのです。これが南の方になるというとそういうようなことはないから、そうして内においても外においてもそう大した違いがないというようなことになれば、自然というものに対してはむしろ親しむというか、これがロシアのような国になるというと、これもやはり人種の性格がいくらかあるかも知れぬが、この自然と闘うというような心持ちになってくる。日本の人は自然に親しむという気分が余計あって、そうしてヨーロッパの北の国の人に自然と闘うというような心持ちが出ているというところをみると、気候というようなものが一方においては民族性に影響するが、またその民族性の特異なところから自然というものに対しての態度が違うということもあり得ると思うのです。そういうところから、やはり民族性というようなものが、特別に自然の環境というものと変らぬ何かが、いくらかあるものと見なくてはならぬと思うのです。単に自然の環境というものによってのみ民族性が形造られるとは

いえぬだろう。民族性そのものにもやはり自然に対しての一種の反応的のものをもっておるが、しかし自然というものもまた、その反応に対して加わる力というものがそこにあるといわなければならぬ。民族性というものが特にあっても、やはり自然の環境でいくらか違う。けれども自然は、同じような塩梅に民族性を造り上げてゆくということはない。そこはおのおのその民族が固有の性格に依って違うは違うけれども、やはり自然はそれに何か加えてゆくということは、それは確かだと、こういってよかろうと思うのです。

それで、今申し上げたいと思うことは、日本は海に限られておって、そうして外へ出ることが出来なかった。外からも日本へやって来ることが出来なかった。それは人の百や二百とか、千や二千というものは、往ったり来たりしますが、大きな民族の大移動ということは海では到底出来ない。東京で、千や二千、乃至一万二万というものが往ったり来たりしたところがそれは大したことはあるまい。みな今そこに住んでおった人と一緒に、同じように見える心持ちになって来るだろうと思うのです。それはそれとして、日本が島国であって外へ出られないということが、余程われわれの性格というか、またわれわれの政治上の形態というか、それからまた社会の組織というようなものにも影響しておっただろうと思います。しかしながらその方はいま関係しないから、ただ日本国民、日本民族としておく。

これがまた、私はこういうことが余程あるだろうと思う。気候というものを先にちょっと話しましたが、日本には春、夏、秋、冬というものがちゃんとある。これが変って、春は春、夏は夏、秋は秋、という風に変わってゆくというところにも、日本民族の性格を造り上げるところの一つの素因というか、一つの要因というか、一つの分子になっておるだろうと思う。これが、ヨーロッパのずっと北のようなところで、一年が明るいときと薄暗いときと半分に分れたり、つまり夜が半年あって昼が半年あるというような国であったり、それから、年がら年中焼けつくような暑いところであったりすると、大分性格が違ってくると思うのです。単に性格ということも何だが、自然というものがそう暑いところにあっては、焼けつくようなものであるから、色彩が極めて濃厚であるために、ものの考え方というか、

ものの感じ方も自然に強烈になってくると思います。これはインドのお経を読んでみればすぐわかることです。ああいうお経に書いてあるような想像力の豊富なこと、そうして色彩の如何にも強いところ、ああいうことは日本にはないことです。日本人には、ああいう強烈な刺戟力に富んだ文章は書かれないし、また考え方も感じ方も出来ないと思います。で、富士山というようなものは、あれは何でもないように思うけれども、日本人はあの富士山に依って余程性格を養われておるのじゃなかろうかと思うのです。これはまあ、余談のようなものだが。

そこで、日本歴史に現われた日本人の性格というようなものが、どういう風になっておるかというと、世間では大抵、清く明るき素直な心というようなことをよくいうのです。これはまあ本当でしょう。しかし、これをそのままに受け容れるということは、如何にも初な心で、如何にも働きのない取り容れ方だと私は思うのです。清く明るき素直なというようなことは、どういう民族でも、あまり文化の発達しない智恵の出て来ない民族では、みんなそうだと思うのです。なんにも日本民族だけの特色ではないと私は思う。そういうものは、どこの民族へ行っても、いま、いわゆる野蛮といっておるような国の人でも、なかなか人間は素直なものです。そうして清らかな朗らかなものです。それに、いわゆる文明人というようなものが行くがために、色々な悪いことを覚えるのです。

これも大分前であったが、エスキモーの人の話を読んでみたことがあるが、エスキモーというものは、ずっとカナダの北の方で、寒いときになるというと、海の上も橇でどこどこまでも行けます。まあ、凍り方のひどいところです。食べ物もどういうものを食べるかというと、魚を食べるのだが、その魚が、そのままで凍ってしまうというのです。日本の刺身のようなものではなくして、魚が全体にみな凍ってしまう。刺身を食べるのが、みんな骨を噛んでおるような話だというのです。それを噛んで生きておるというようなことも聞いておるのです。それから、オットセイかラッコか、ああいうものを捕まえて食べるのだが、それもそのままで、まあ人間でない他の動物が食べるような塩梅に叩き切って、血だらけなものを頬張って骨のままにガリガリ食べる、というようなことが書いてあったのですが、如

何にも蛮的な獰猛な動物のようにも考えられるが、そこではそういう生活をしなければならぬから何だが、しかし人間はすこぶる純朴なものだということです。うそということが何にもなく、天然のありのままに赤裸々の生活をしておるというようなことだが、もしエスキモーが歌でも歌うかどうかしたらば、「清く」ということをいうかどうか。あそこらは寒いから、吹雪というものは非常なものだ。清く明るくということはいえぬだろう。

けれども、日本のような気候と、日本のような朗らかな自然界におったらば、私は、自然にそういうことになるだろうと思われるネ。別にそれが、日本民族の特色ということはいわぬでもよいじゃないかと思うのです。それからそれを特色にするというと、困ったことは、日本がこれから拡がってゆこうと思うときに、拡がる機会がなくなるだろうと思うのです。どうしてもただ横着になれというわけではない。けれども、少しものを包んでゆくというときには、清濁併せ呑むというような、シナ人の性格というようなものも一つ入っておった方がよいと思うのです。あまり水が清らかであるというと、魚が棲まぬということもあるし、あまり重箱の隅を楊枝でほじくるということになると、どうも人が寄り付かぬということがよくあるですナ。そんならといって、横着になって、ずるくかまえておるということではない。けれども、清らかはいくら清らかでもよいけれども、その清らかが、山の間を流れる溪川の清らかさでなくして、洋々として、五大州、世界をも包むことの出来るような、大海原の清らかさがあってほしいと思うですナ。

民族性というものは、歴史が出来てから何百年か何千年かで、きちんと決ってしまうかどうか。日本の歴史が出来て百年なら百年、五百年なら五百年の間に、民族性というものがちゃんと出来上ってしまって、それから先は動かぬものか、どういうものか、こういうことです。ところが先にも申しましたように、民族性というものは自然の環境に依って動いてくるから、その自然の環境というものが、ちゃんと、山とか河とかいうことでなくして、隣の国にシナのような国がある。北の方にロシアのような国がある。また東の方にアメリカのような国がある。すると、そういう人間と接触する点において、やはり何か自然の環境から受けると同じような影響を受けてきはしないかと思うのです。

そういうようなものも十分に取り入れてよかろうと思う。取り入れていかぬといえば、どうも人間が単なる直なる心では拡りがなくなってしまうので、今日、これからますます国を開いて外へ出ようというときには、そういうような閉じられた限られた性格、或いは、民族性というようなものに閉じ込められておってはいかぬじゃないか。こう、しょっちゅう思うのです。そういうように変化していかなければならぬ方面もある。けれども、そうではなしに、変化しないで、何か根本的なものがどこかあるというようなことも、いってよいじゃないかと思うのです。

そうすると民族というものは、歴史的に何年の何月幾日にきちんと決ってしまった、それから後というものはハンコを押したようなもので動かぬというものではなくして、極めて流動性をもったもので、百年なら百年、二百年なら二百年経って、色々取り入れてゆくというようなことも出来るものがある、と見ていきたいと思うのです。そういうものを性格の上に見て、動きのとれぬことを性格と見ないで、動きがとれていて、しかもすぐに動かないものをもっておるというようなものの、一つ基礎を見ていったらどうか、こういうのです。

だから民族性というものは、何かスタンプを押したようにゆくものでなくして、そこには、余程流動性をもっておって、少しどうかすれば拡がってもゆき、縮まってもゆき、形が必ずしも四角ではなく、三角にもなり、或いは円にもなり、或いは楕円にもなるというような塩梅で、流動性をもっておるが、その流動性というものが、やはり何か中心になるものがあって、そうしてそれで、その流動する方向というか、形というか、そういうものを規制してゆきたい。そういうものを佛の性格と見ていったらどうか、こう思うですナ。だから、直なとか明るいとかいうようなことでは、どうも自ら守って、そうしてどうも、羅漢さんのような塩梅で、自ら清しとして超然としておるにはそれでよいかも知れぬ。けれども菩薩的な性格をもたせようと思うときには、この独善主義で山へ入ってしまったような直な心持ち、明るき心持ちではいかぬ。明るさは、どこまでも明るさをもっていなければならぬけれども、その明るさが、時に応じては、どうとでもなり得る。しかしながらそこにはやはり明るきものはあってほしいわけなんだが、そういうよう

なものを養ってゆくのは、それは意識的に養ってゆけるものだと思うのです。つまり、計画的に統制的にやってゆけるものだと思います。それをやはり十分に自覚して、そうして、こういう時にはこう、ああいう時にはああ、というような塩梅に変えていかなければならぬと思う。そこに民族性の流動的なものを見たい。こういう風に私は、話が甚だまとまらぬようだけれども、見たいのです。

だから、もう一辺まとめて申しますというと、日本人の性格というものは、歴史の何年何日と決ったものではない。これはもう、しょっちゅう転回してゆくものである。今から千年前はどう、二千年前はどうであったが、今から二千年後にはまた、こういう風に移り変ってゆく。移り変ってゆくがしかしその中、移り変らない、その移り変りを指導してゆくものが何かある。それを本当の性格といいたい。その性格は、単に明るいとか真直だとかいうようなことでは、性格の根本原理というか、そういうものはつかまえられぬと思うのです。そんならそれは何か。それを一つ見て、そうしてそれと佛教との関係を見たいというのが、まあ、私の精神なんです。

そんな日本民族というものが、どういうものであるにしても、その日本民族の根本的性格をこしらえておるものは何か。そうしてそれが、このごろの歴史にもずっと動いてゆくところのものでなければならぬ。そうすると、私の考えでは、これは日本だけというわけにはいかぬかも知れぬ。東洋全体ということになるかも知れぬ。けれどもしかし、とにかくこういうことはあり得ると思う。ものを取り入れる力が、すべて周囲の環境の動きにつれて動くという順応性というものは、日本人に余程あると思う。順応性ということは、まあ、やわらかな粘土のようなもので、それにどういう形をつけるか、それに応じてゆく。それに応じてゆくが、そんなら、その粘土の性質そのものが変ってしまうかというと、そうではなくして、そのねばりはやはり十分にもっておる。それで、どこへ行っても順応出来るというようなことがあったと思うのです。ただ、この順応ということが、日本が島国に限られてしまったというところから、少しく限られてしまって、硬張ってきたような傾きはあると思うのです。しかしながら、それは本来のものではなく

して、いわゆる島国で、国が限られたというところから、順応性が硬張ってきたのだろうと思います。

それから、悪い意味でいうと、感傷的だというのです。感傷的ということは、いい意味でいうと、純情であるという具合に言いたいと思うのです。純情であるということはどういう意味であるかというと、理窟でこねない、こういう例は日本でも今日でもやはり中々とれないのです。それがよいときと悪いときとがあるので、これはやはり余程考えて直すべき点は直していかんならぬと思うが、純情ということは決して悪いことはなかろうと思う。

徳川時代によく義理と人情というようなことを云っている。義理という方はどういうのかというと順応性の方で、あの人もこうやるから自分もこうやらんならぬ、世間はこういう風であるから自分もこうせねばならぬといって、一方では順応性というものが集団的生活の行動を規制するということになる。それから今いう純情的なものはどうなるかというと、やはり人情というような塩梅で、親は大事だ、子供は大事だということになって、世間ではどうも親を犠牲にせんならん、子供を犠牲にせんならぬというようなことがあって、そうしてそれは世間の義理というか集団生活をやっているものが履んでいかなければならぬ道であるとして、而もそこに人情で、悲しいことは悲しいということがあるのですナ。まあ昔からいろんな戦さがあったり、また難しい社会的の事情に遭遇して、日本人がどちらへついてよいかというようなことに困った場合が幾らでもある。その場合に人情に従うか義理に従うかといって、そこに心の中の悶えというものが強く感ぜられる。その強く感ぜられるのが浄瑠璃となったり、芝居となったり、小説となったり、文学的の話題をそこに供給するわけだろうと思います。

これが、外国の人といってはいかぬが、欧米の人のいき方と余程違う点であると思うのです。一概には勿論いえぬでしょうけれども、欧米の人は分別により富んでいると思うのです。科学というものがヨーロッパに発展して、日本に発展しなかったというようなことは、日本の人はそう知性的でないのです。純情的であるから知性的にものを見るということが短所であって、理窟でこうだああだということをいい得ないで、そのときに情に委して行くというよう

なことがあるのです。それがよいことと悪いこととある。例えば、これはよくお聞きだと思うが、日本の人でアメリカへ行っておった。そうして何か下々の働きをしておって、窓ガラスを拭いたとか、或いは勝手でお皿を洗ったとかいうことがある場合に、ガラスを拭きそこなって割った、お皿も洗いそこなって割った。こういうときにどうするかというと、まあ日本の人は一所懸命に謝る、どうもすみませぬといって謝るが、ヨーロッパ風というか、アメリカ人も其の中へみんな入れてしまって、アメリカ人というのもヨーロッパから来た人間なんだが、その人はそういうことをきかない。割れた皿ならそれをまた償うて元の儘にしておく。ガラスならば元のガラスを入れておけばよい。こうなるわけです。ところがガラスを拭いたり皿を拭いたりするような人はそれだけの力が必ずしもないのです。財力がないから、どうぞ赦してくれというようなわけだが、それを怒っている人の方では、その意味が分らない。何もいくら謝ったって割れたお皿が元の通りになる理窟はない。

日本でも昔噺に皿屋敷といいますか、お菊というのが井戸へはまった。それから夜中に出て来て一枚二枚といって勘定したというのと同じような訳で、主人の方が使用者の人に元の通りにならぬものをいくら謝ったってしようがない。こういうわけです。そうすると、日本の人はこんなに謝っているのにきかぬというのは誠にわけの分らぬやつだというようなことで、そこらのガラスをまた二、三枚か三、四枚か割ってしまうのです。そうして友達のところへ廻って行って金を借りてくるかどうかして、それでガラスを元の通りに入れて意気揚々として帰る。一時の快は快だけれども勘定して見ると余り得にはならぬわけです。そういうことがあるのです。そうすると日本の人はどうもアメリカ人というやつは如何にも勘定高い、人情も知らない人間だと感ずる。

けれどもアメリカの人から考えるというと、何だ日本のやつはわけの分らぬやつだ、ガラスを割って謝ればまた元の通りになるものだと考えるから面白うないという。だからどっちがどうなるのか、その立場に依って考えなくてはならぬ。けれども兎に角、西洋の人の方は一般に勘定高いといってよい。その点ではシナの人も勘定高いというよう

なことで、シナの人の勘定高いのは西洋の人の勘定高いのとちょっと意味が違うけれども、或る意味では勘定高いという。実用性を重んずるというのがそういうところにあるのです。実用性を重んずるからこういう勘定でこうしてあしてと算盤にのせる。算盤にのせるということは、必ずしも感情で勘定をするというわけではなくして、理窟に合うてこういう理窟であるからああいうことになる、だからこうしたならば、ああなるというような塩梅で勘定をしてやる。これはそういわれるか、いえぬか分らぬけれども、今日のような戦さでも、ドイツの方が余程勘定してかかっているのです。日本の戦さのやり方は勘定が余り入っていないのではないかという気がする。今日になって色々理窟をつけておっても、ほんの始めというものは、計画を立てて勘定づくでやってるのかどうかと思うのですがネ。ドイツはそうでないと思う。すっかり勘定をしてやっている。そういう点が大分違うと思います。

で、西洋に科学と云うものが発達して東洋に科学というものが発達しなかったという点も、そういうことがあるだろうと思うのだ。中古時代の西洋の歴史を見れば、宗教的な信仰が非常に盛んであって、こういう科学なんというようなことはなかったのです。ところが十八世紀頃からだんだん科学が発展してきて、今日は、十九世紀を通って二十世紀の今日になっては、何もかも科学というようなことになってしまっているのです。ところが東洋にはそれが発展しなかった。日本でもそれが発展しなかった。その点においては日本人は他の東洋の諸民族と共通するものを持っているといってもよいが、その実はわれわれの先祖から伝えられて来ているところの純情というような点が日本人に多いところから、科学的な組織的な勘定深い分別の働きというものが出て来なかったのじゃないかと思うのですがネ。これは甚だ纏りのつかぬ話になっておりますけれども、事実をいうとこういうことになるのです。やはりそこは、日本人なんだろうが、私は殊に典型的な日本人なんだから、甚だ分らないのだけれども、純情ということと、それから随順して行くということが、これが余程あると思うのです。随順して行くということがあるから拡って行くということをしなければならない。それで佛教が入って来れば佛教を採る。儒教が入って来れば儒教を採る。西洋の科学が入って来れば科

学を採る。哲学を採る。そこはどうも自由自在に採り入れている。ここに随順ということが随分あると思うのです。それでは、採り入れたものそのままで何も変らぬかというと、そうではない。やはりそこに日本的なものをちゃんと持っているのです。これは何でもないような小さなことです。けれども小さなところに却って特色が見えることがある。

それは紙を挿んだりするちょっとしたバネというものがあるでしょう。紙を二、三枚か五、六枚か七、八枚か、こうして挿むものがある。あの紙挾を、私はフランスで買ったのとイギリスで買ったのと、アメリカで買ったのと、ドイツでは買わなかったようですが、それにその国の特色がある。近頃、日本へ帰って、いま戦さになって何にもないようになったが、そうでないとき、その作り方がイギリスのやつは勘定一方でありまして、きちんとしたもの、フランスになりますと、いくらかやわらか味があって美術的だと思われるものがある。ところが日本へ来るというと、あの紙挾の形が色々なんです。妙な形をしたのがある。ちょっと面白い偶然なことだったけれども、成程こういうところを見ても特色があるものだなと思ったことがあるのです。それはむしろ細かい方の特色というか、例えば根づけのようなものを見ているというと、今はないけれども、煙草入れを腰へ差して、大抵丸いこんなようなものがあるでしょう。あれの意匠というものは微に入り細を穿った中々面白いものですネ。ああいうことがフランスの大臣か何かしておった人で、その根づけをやたらに集めた人があるのです。それを集めたところを見たことがあるが、それは各種の根づけがある。あの研究というものはまた面白いのだが、今は到底出来なくなっている。けれどもああいうものを見るというと、日本人の特色というものが、西洋のものも入れればシナのものも入れる。どこのものでも入れるが、その入れたところへちょっと日本的なものを加えるのです。順応はいくらでも順応して行くのだが、その順応して行くところに特色を加えて行くのです。

それと一つ申上げたいと思うのは何かというと、美的なものというか、その美的なものが雄大な美的じゃないのです。如何にも細やかなちょっとしたところに面白味を見るというような性格ですナ。ちょっとしたものを美化すると

いうようなところがあるのです。それでこういうお皿にしても、お盆にしても日本の食器というものは色々の形がある。四角のものもあれば円いものもある。深いものもあれば平たいものもある。ものの使い方に依ってもあるでしょうが、いわゆる、西洋料理というものはお皿は、大抵円いのよりないだろう。四角なお皿を使いますか。四角なお皿はないだろう。みんな円いですナ。スープを飲むときはいくらか深いだろうが、大抵いくらか平たい。

ところが日本のあのお膳に載せるのを見て御覧、お膳に円いものもあれば四角のものもあるが、その四角なら四角のところへ並べるのがいろんな形がある。あれだけ美事に変化しているのです。そして普通に円ければよいものも、その円いものの角をちょっと切ってある。こう円くしないでほん僅かだけれども僅かだけ切ってある。ああいうことは外国の人はしない。あれは日本の特色だと思うのです。ちょっと欠いたところがそこが何ともいわれない余程面白味があるのですナ。それからそれは細かいといえば細かいのだが、俳句の方でも十七文字でまあ天地の幽玄の美を表わそうとしますから、まあ大変なことになるが、それをやはりやる。十七文字の中にちゃんと収めてしまう。それを読んで見ているというと、俳句などというものは、唯ちょっとしたような猫が鳴いたとか、蛙が跳んだとか、雀がどうしたとか、此の頃は鈴虫が鳴くとか、コオロギがどうとか、極めて小さなことだが、そのギイギイと鳴いている、コオロギの鳴き方を俳句をやる人がちょっと掴むというと、そのコオロギの声を通して天地全体に響くものが窺われるようになる。あれも特色だと私は思うのです。あれを外国の人にやらせるというと、それはまあ余程長いものでも書くか、殊にインド人でもあったら、お経一巻でも書かねば埒があかぬということになる。ああいう点で日本人が大きなものも小さなものの中へ入れてしまう。そういう点が特色であると思うのです。それを何と云ってよいですかナ。大小というわけでもなかろうが、初めに順応といったから、どういう名をつけますか。何か一つ考えておいて頂いて、要するに小さなものを通して大きなことを見るということになるのですナ。これが佛教の方の言葉でいえば、芥子の中に須弥を入れる。須弥山が小さな芥子粒の中に入ったというようなわけですナ。それだから芥子粒の須弥山

性というかな。そんなような性格があると思うのです。シナ人になるというと、如何にもぼんやりしているので、どこから入ってどこから出るか分らぬようなぼんやりして決まりがつかぬ。日本の人は決まりをつけてそうして大きなものを見る。

（未完）